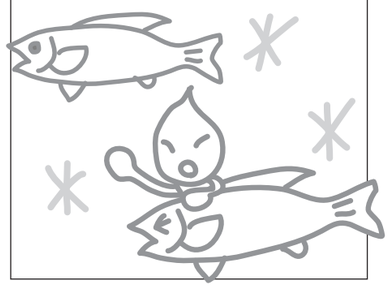
鮎が満ちる川へ

---水の旅②

山から川へ

山から川に水が集まって海に向かって下っていくよ。
水は、森の育てた豊かな栄養分を運びながら、川に住む生き物を育てているんだ！
でも、最近は昔に比べて川の魚が少なくなって釣りの好きなおじさんたちも寂しいみたい。



崩壊が目立つ三嶺（左の崩壊は平成16年の台風被害個所）

物部川の自然

約25年前…物部川は四国山地の恩恵を受け、アユの解禁日ともなれば川岸にたくさんの釣り人でにぎわい、夕方2時間程度の釣りで10匹以上釣れるような川でした。アユの漁獲量だけでも76トンあり、常時、川漁を楽しむ人であふれていました。

現在は長年の土砂やヘドロをため込んだダムの影響で、川の水が濁ると、澄むのに約3週間を必要とし「濁水0」という日はわずかしか見られない川に変わってしまいました。

アユも冷水病がまん延し、漁獲量は1トン未満と史上最悪を記録しています。地球温暖化による気象の異変も影響し、アユばかりでなく川魚の生息環境も悪化しています。

天国と地獄

平成16年、物部川のアユの減少をどうにかして止めようと魚の生息環境の整備に苦労した結果、天然アユが200万匹も川をさかのぼってきました。

資源保護に取り組んでいる関係者たちも「アユの恩返しでは！」と喜びました。

しかし、喜びもこの夏の台風豪雨が川の源流域を崩壊させたことから一変しました。豪雨により崩壊した三嶺は途中の谷をえぐり取り、大量の土砂が物部川を濁水に変えてしまいました。ダム湖にも土砂や流木がヘドロの中に堆積し、水質汚染も起こしています。

ダムを越え、下った泥は平成16年から18年の3年間で20～30万トンと言われ、それにより豊かだった物部川の生態系は破壊され、川虫を含む生き物が姿を消しました。

新物部川大橋と物部川

香宗川と夜須川

課題があるのは物部川だけではありません。市内を流れる香宗川や夜須川にも生活雑排水や農業用排水が流れ込み、川を汚しています。

また、河川へ捨てられたゴミが海へ流れ、クラゲと間違えたカメがビニールなどを食べてしまうのです。自分たちの住んでいるまちや川をきれいにするためには、私たちが生活の中で使った水がどれだけ川に影響しているかを一人ひとりが考え意識しなければいけません。

活気あふれる川を取り戻そう

たくさんの川魚のいる川は石に付着した泥を食べ、生き生きとしたきれいな流れになります。

また川魚をねらうミサゴやカワセミ、サギ類など多様で豊かな生態系を構成します。内水面漁業を維持するとともに遊漁者や子どもたちも川とふれあい、活気あふれる川になります。

そんな美しい川を取り戻すため、今さまざまな取り組みが行われています。

河川の環境整備は1人でやろうとしてできるものではありません。流域の各種団体の協力が必要です。

「50年前の水量豊かで魚たちのすむ、子どもたちの遊ぶ川を目指そう！」と川の再生に向けて働きかけ、下流の漁協・農協・水利組合・商工会、そして上流の森林組合の団体と個人が協力してシンポジウムや環境バスツアーなどを行っています。

普及活動を通じて川の大切さをたくさんの人に知ってもらい、一人ひとりにできることから取り組んでもらおうと呼びかけているのです。

アユは県内でとれなくなる可能性がある

物部川漁業協同組合 組合長
宮岡 哲男 さん（野市町）

ここ数年、物部川の環境は特にひどく、年間の活動としてアユが産卵しやすいように土砂を除き、小石を入れる作業や河口閉そくの解消を重機で行っています。

河口は川の流れより波の力が強いので土砂が押し戻され、河口を閉じてしまうのです。そのため深夜でも、潮の最も引いた時をねらって土砂を取り除きます。

温暖化の影響で魚も取れる場所が北上していると言われます。日本海側や岐阜ではアユの漁獲量が増えたと聞きますが、今後、物部川も含めて高知県でアユがとれなくなるのではと心配します。組合としても魚の住みやすい水辺の整備や山に木を植える活動をしていきたいです。そのためにはまず、組合員の確保が重要と考えます。会員が増えることによって魅力ある漁場作り、漁協活動が活発になるのではないかと思います。

アユが川をのぼれるように河口の土砂を取り除く

取り戻そう！アユが泳ぐ川を